

南あわじ市文化財調査報告書 第16集

南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅹ

2013年度 埋蔵文化財調査

2018年3月

南あわじ市教育委員会



平石遺跡 26区 遺構65 鉛製ミニチュア三足器出土状況



平石遺跡 26区 遺構65出土 鉛製ミニチュア三足器

はじめに

南あわじ市は、平成28年4月に『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」～古代国家を支えた海人の営み～として淡路市・洲本市とともに日本遺産に認定されました。31の構成文化財の中には平成27年4月に市内で発見された松帆銅鐸7点をはじめとして、多くの文化財が南あわじ市から選ばれていることから、いにしえより淡路島が住みやすい場所として栄えていたことがうかがえます。

このような中、平成25年度の埋蔵文化財調査の成果概要を『南あわじ市埋蔵文化財調査年報X』として刊行する運びとなりました。今回報告されている遺跡は2遺跡のみですが、1つは湊地区における圃場整備事業では松帆銅鐸埋納推定地の近くに位置する縄文時代～室町時代の集落遺跡である平石遺跡の本発掘調査の成果です。また、国衙地区における圃場整備事業に伴う調査では既に周知の包蔵地である2遺跡に加え、新しく2遺跡が見つかり、本市の歴史も少しずつ明らかになってきました。

今年報という形で不十分さもあるとは思いますが、今後もさらなる努力により本市の文化財保護と理解に努めていく所存ですので、ご支援賜りますようよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご指導ご協力いただいた方々に対し、心よりお礼申し上げます。

南あわじ市教育委員会

教育長 浅井 伸行

例 言

1. 本書は南あわじ市教育委員会が2013（平成25）年度に実施した、埋蔵文化財調査の記録である。
2. 調査は南あわじ市埋蔵文化財調査事務所の山崎裕司・坂口弘貢・定松佳重・的崎薫が担当した。
3. 出土遺物の整理作業は、赤井友美・宇治田力・垣脇美奈子・白川裕二・富岡美早子・豊田亜希子・濱本善美・榎本早苗・松下矩之・三宅靖子が行った。
4. 本書の編集は的崎が行った。執筆・レイアウトについては文末に記している。調査担当者については、調査一覧表に記す。
5. 各遺跡の発掘調査および本書作成にあたっては、森岡秀人氏のご協力とご指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表す。

目 次

巻頭写真図版

はじめに

例言

第1章 埋蔵文化財事業の動向 1

第2章 埋蔵文化財調査の成果

第1節 埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図 2

第2節 主な埋蔵文化財調査の成果

1 嫁ヶ淵遺跡・国衙廃寺跡・木辺遺跡・長手遺跡 3

2 平石遺跡（5次調査） 7

第1章 埋蔵文化財事業の動向

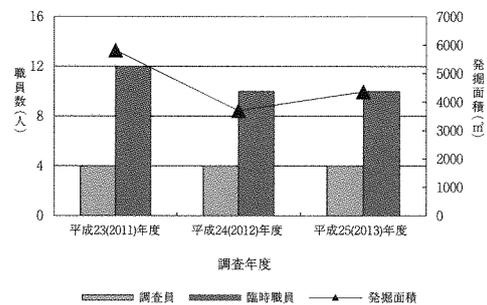
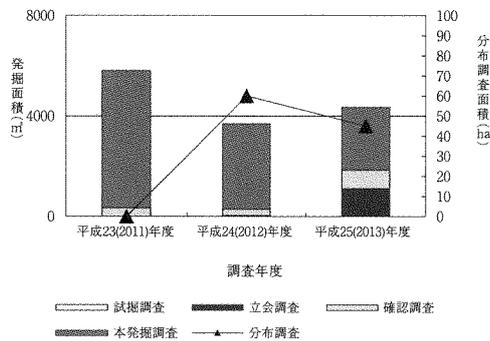
平成25年度は、分布調査2件、立会調査3件、試掘調査1件、確認調査1件、本発掘調査1件を実施した。立会調査・試掘調査・確認調査・本発掘調査の調査面積合計は4,353.23㎡となり、前年度にくらべて増加となった。

主な発掘調査は、経営体育成基盤整備事業による湊里地区での本発掘調査1件、国衙地区での確認調査1件を実施しており、圃場整備事業に伴う調査の割合が高いのが特徴となっている。

特筆すべき調査成果としては、湊里地区で調査した平石遺跡は縄文前期～室町の複合遺跡で、縄文時代後期の遺構をはじめとして、様々な時代の建物などを確認した。また、国衙地区の確認調査では新たに2遺跡を発見した。

年 度	分布調査	立会調査	試掘調査	確認調査	本発掘調査	発掘面積	職 員 数	
							調査員	臨 時
平成23(2011)年度	0	0	0	339.3	5,471.4	5,810.7	4	12
平成24(2012)年度	60.0	0	28.0	256.0	3,406.7	3,690.7	4	10
平成25(2013)年度	45.113	1098.63	16.0	736	2,502.6	4,353.23	4	10

*単位：分布調査 (ha) 調査面積 (㎡) 臨時の職員数はその年度ののべ人数
調査量と職員数の推移 1

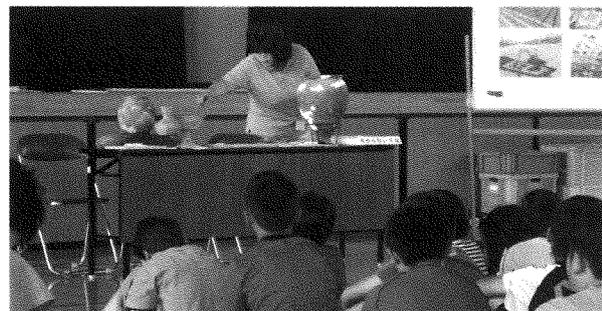


調査量と職員数の推移 2

普及啓発活動として、平成26年1月～4月にかけて『発掘調査速報展－平成24年度調査』を市内4会場で巡回して開催した他、西淡公民館（現湊市民交流センター）ロビーにてミニ展示を行い、展示品を年3回入れ替えた。刊行物は上記速報展のパンフレット、『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』『久保ノカチ遺跡Ⅱ』の発行を行った。また、小学校2校への出前授業やトライやるウィークでは中学校3校計8名の生徒が遺物洗浄などの整理作業や市内の遺跡めぐり・測量作業・発掘調査などを行った。夏休み期間中には、小学生対象のわんぱく塾において、市内4会場で勾玉作りを行った。



発掘調査速報展の様子



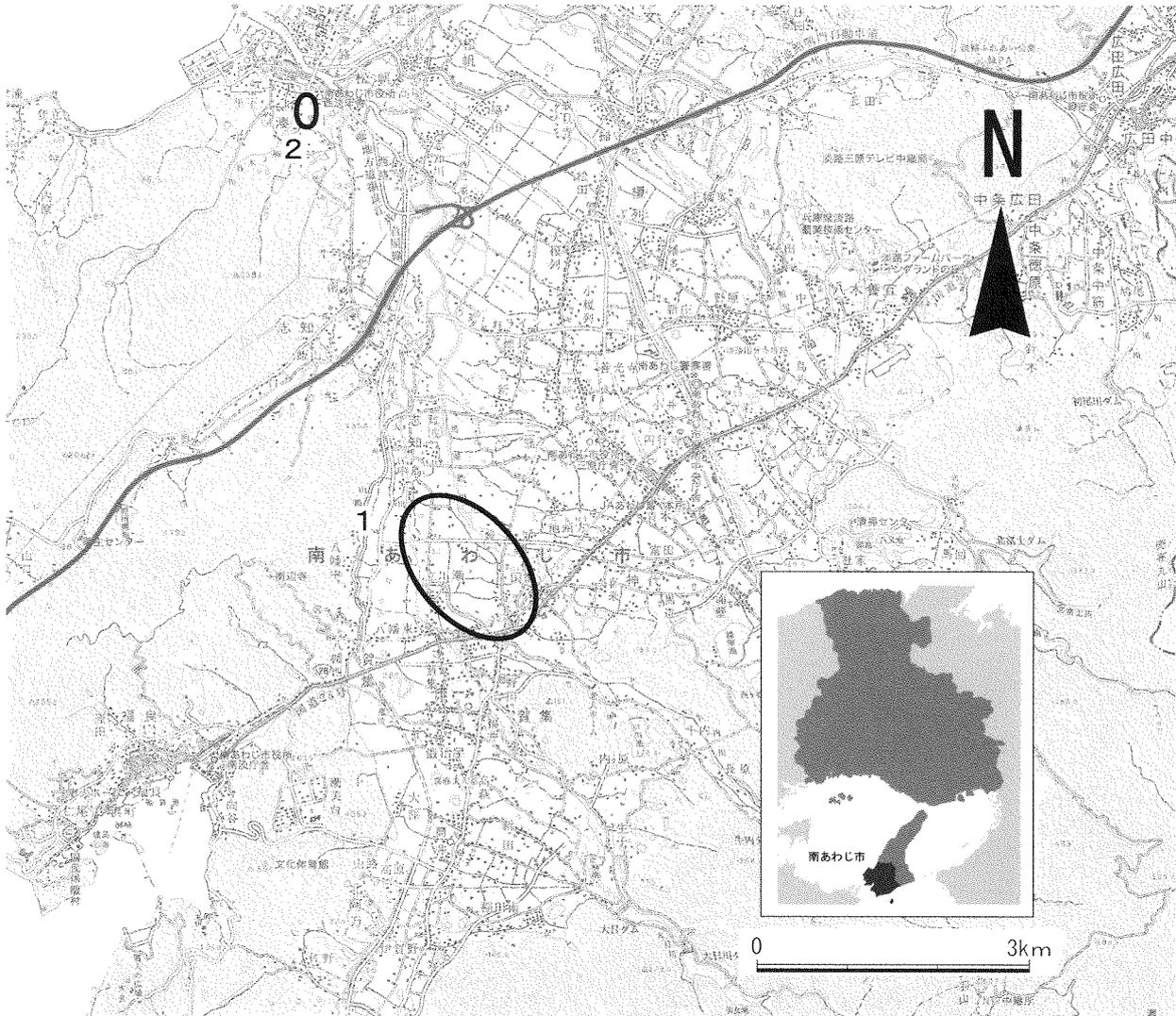
出前授業の様子

第2章 埋蔵文化財調査の成果

第1節 埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図

No.	事業名	内容	面積	担当者	遺跡名	所在地1	所在地2	調査期間	調査成果
1	経営体育成基盤整備事業 (国衙地区)	確認	736㎡	坂口・山崎	嫁ヶ淵遺跡・ 国衙廃寺跡・ 木辺遺跡・ 長手遺跡	神代	国衙	H25.6.3~ 12.3	新たに古代~中世の木辺遺跡と中世の長手遺跡を確認
	宅地造成工事(民間)	分布/ 立会	1130.92㎡ /34.41㎡	山崎		広田	広田	H25.6.25/ 8.5	土師器・須恵器採集。立会は包含層未確認
2	経営体育成基盤整備事業 (湊里地区)	本発掘 +立会	2502.6㎡+ 861㎡	的崎・定松・ 山崎	平石遺跡	湊	里	H25.7.16~ H26.1.17	縄文時代後期~鎌倉時代の遺構・遺物確認
	市営住宅建設事業(広田地区)	試掘	16㎡	山崎		広田	中筋	H25.8.26~30	遺構・遺物未確認
	個人住宅建設	立会	203.22㎡	山崎	松原千畳敷遺跡	松帆	古津路	H25.10.8	遺構・遺物未確認
	経営体育成基盤整備事業 (片田地区)	分布	45ha	坂口		志知	志知北	H26.1.22~ 2.12	全域で遺物採集

調査一覧表

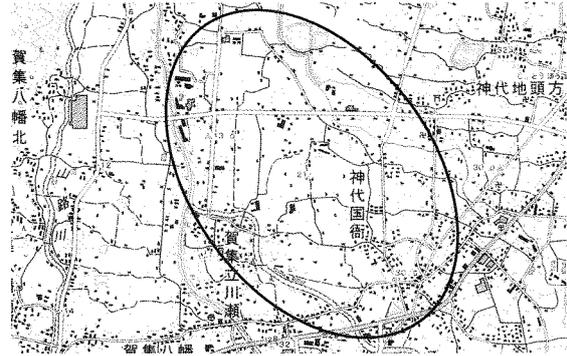


調査位置図

第2節 主な埋蔵文化財調査の成果

1 嫁ヶ淵遺跡・国衙廃寺跡・木辺遺跡・長手遺跡

所在地 賀集立川瀬～神代国衙字中ノ内外
事業名 経営体育成基盤整備事業（国衙地区）
担当者 坂口弘貢・山崎裕司
種別 確認調査
調査期間 平成25年6月3日～12月3日
調査面積 736 m²（2×2m184ヶ所）



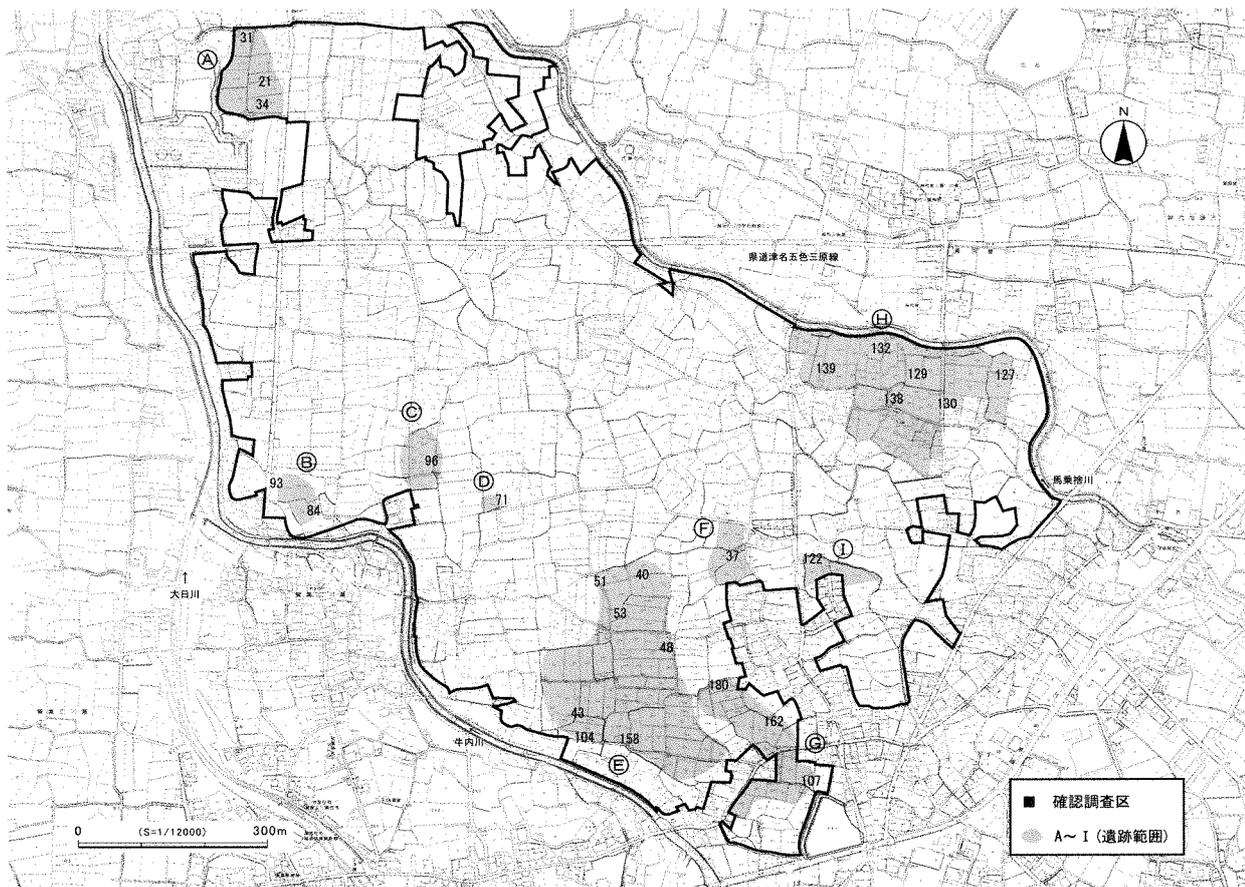
調査の位置

1 調査内容

本調査は、賀集立川瀬～神代国衙地区で計画されている県営圃場整備事業に伴う確認調査である。

調査地は、三原平野中央南寄りの南東～北西方向に緩やかに傾斜する水田などからなり、北側を馬乗捨川、南を牛内川、西を大日川に挟まれた範囲となる。調査地北部には、古代官衙遺跡である嫁ヶ淵遺跡、南部には国衙廃寺跡などが含まれる。

調査は、農作物の作付け状況を見ながら、2×2mの調査区を184ヶ所設定し、進めていった。以下主な調査区の概要を地点ごとに記す。



調査区設定図

[A地点]

調査地北西部にあり、ベースとなる比較的安定した黄色系の土層が広がる。No.21 では小穴や流路状の遺構、No.31 では落込みや小穴、No.34 では浅い落込みを確認した。この内、No.21 の小穴5と No.31・34 の遺構は飛鳥～奈良時代と考えられる。

[B地区]

調査地西部に位置する。No.84 で土坑・小穴・溝、No.93 で小穴を確認した。いずれも中世の遺構と考えられる。

[C・D地点]

調査地中央西寄りに位置する。No.96 で小穴、No.71 で溝を確認した。いずれも遺物は少ないが No.96 が古代、No.71 が古代～中世と思われる。

[E地点]

調査地南部に位置する。No.40 で柱穴・小穴、No.43 で土坑、No.48 で小穴、No.51 で落込み、No.53 で遺物包含層、No.104 で小穴、No.158 で土坑・小穴などを確認した。No.40・51 が中世で、それ以外は奈良～平安時代と考えられる。

[F地点]

調査地中央西寄りに位置する。No.37 で溝・小穴などを確認した。平安時代～中世と思われる。

[G地点]

調査地南部に位置する。No.107 で土坑・小穴、No.162・180 で小穴などを確認した。いずれも中世と考えられる。

[H地点]

調査地北西部に位置する。No.127 で土坑・小穴、No.129 で小穴・落込みなど、No.130・132 で小穴、No.138 で土坑・小穴、No.139 で小穴・溝を確認した。いずれも中世と考えられる。

[I地点]

調査地中央東寄りに位置する。No.122 で落込みを確認した。土師器小片が出土しており中世と思われる。

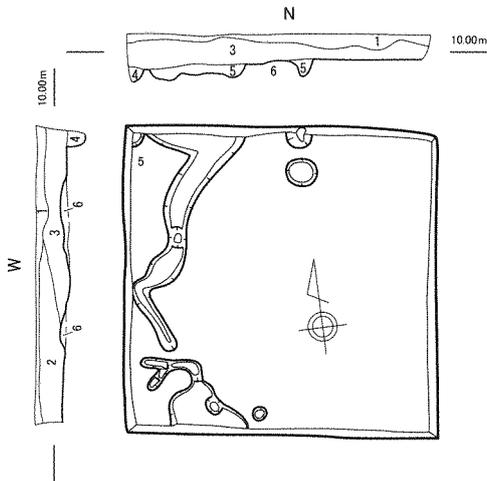
2 まとめ

本調査により、大きく8ヶ所（A～I地点）で遺構又は遺物包含層を確認した。

A地点は調査地北西部に位置する。飛鳥～奈良時代の遺構や遺物包含層が確認できた。嫁ヶ淵遺跡の北側に立地することから同遺跡の周縁部と思われる。B地点は調査地西部、牛内川の北側に位置する。古代～中世が想定される。C・D地点は調査地中央西寄りに位置しており、C地点が古代、D地点は古代～中世と思われる。3地点を合わせて木辺遺跡とする。E・F・G・I地点は調査地南部にあり古代～中世が想定され、4地点を合わせて国衙廃寺跡とする。H地点は調査地北東部の馬乗捨川西～南沿いにある。広く中世の遺構が確認でき、長手遺跡とする。県道津名五色三原線から西の馬乗捨川南西部は河川の影響のためか、砂層やシルトなどが堆積する非常に不安定な土層で、出土遺物が少なく、小さな破片のみであった。

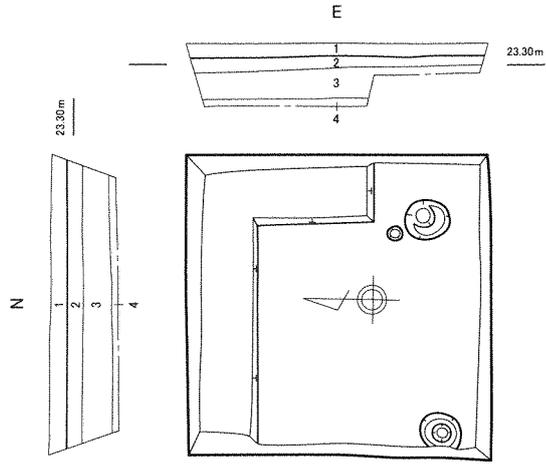
農作物の作付状況から十分調査が実施できていない部分もあり、次年度に周辺域の調査を行った上で遺跡範囲を判断していく必要がある。

(坂口)



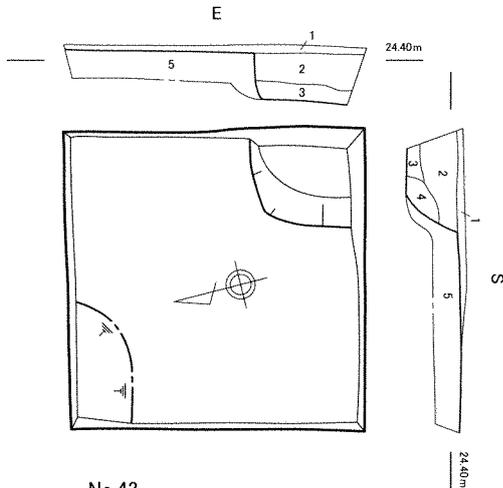
No.21

1. 灰白色2.5Y8/1砂質土+2・3層
2. にぶい黄色2.5Y6/4砂質土(Fe・Mnわずかに含む)
3. 灰黄色2.5Y6/2砂質土(Feわずかに含む)
4. 黄灰色2.5Y5/1細砂質土
5. 3+6層
6. 黄色2.5Y7/8細砂質土(Fe・Mnわずかに含む)



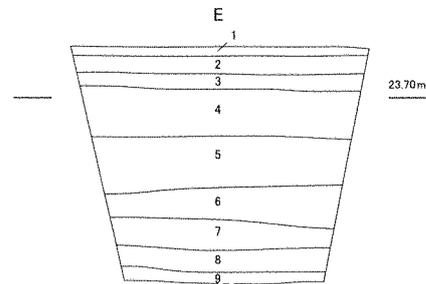
No.40

1. にぶい黄橙色10YR7/2極細砂質土(Feまばらに・遺物含む)
2. 褐灰色10YR4/1細砂質土(Mn多く・遺物含む)
3. オリーブ黒色5Y3/1粘極細質土
4. 灰オリーブ色5Y5/2粘細砂質土



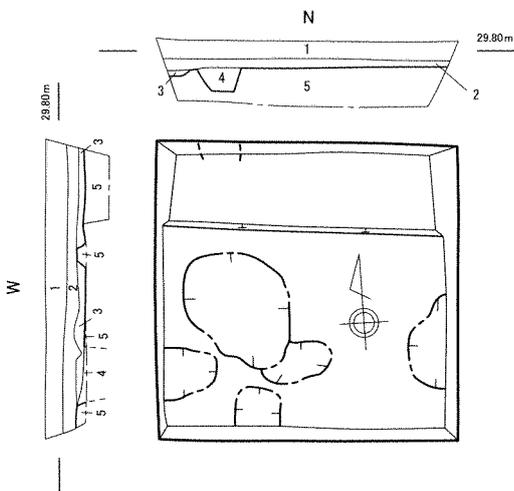
No.43

1. にぶい黄橙色10YR7/2極細砂質土(Feわずかに・遺物含む)
2. 灰黄褐色10YR5/2土(遺物含む)
3. 灰黄褐色10YR4/2土(遺物含む)
4. 褐灰色10YR4/1土(遺物含む)
5. 黒褐色10YR3/1粘質土



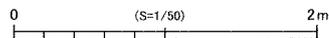
No.53

1. 灰白色10YR7/1細砂質土(Feまばらに・遺物含む)
2. 褐灰色10YR6/1細砂(Feまばら、Mnわずかに・遺物含む)
3. 褐灰色10YR6/1細砂質土(Mnわずかに・遺物含む)
4. 褐灰色10YR4/1粘細砂質土(遺物含む)
5. 黒褐色10YR3/1粘極細砂質土(遺物含む)
6. 黒褐色10YR3/1粘質シルト(遺物含む)
7. にぶい黄橙色10YR7/2砂+黒褐色10YR3/1粘質シルト(遺物含む)
8. 灰黄褐色10YR5/2細砂(遺物含む)
9. 礫混黄灰色2.5Y6/1砂(遺物・φ20cm以下多く含む)

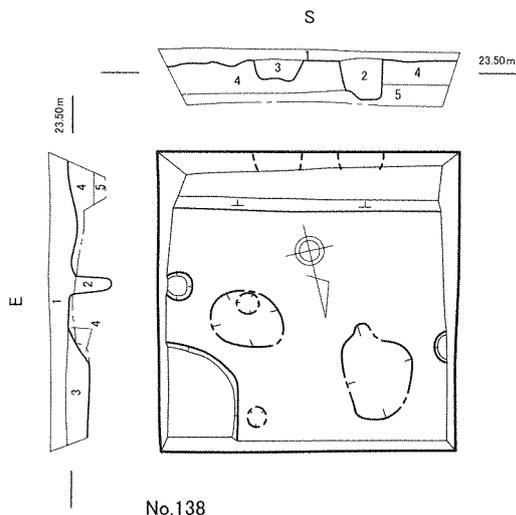


No.107

1. 灰黄褐色10YR6/2極細砂質土
2. にぶい黄橙色10YR7/3極細砂質土(Fe多く・遺物含む)
3. 褐灰色10YR5/1細砂質土(Mnわずかに・遺物含む)
4. 灰黄色2.5Y6/2細砂質土(遺物含む)
5. 黒褐色10YR3/1粘質土

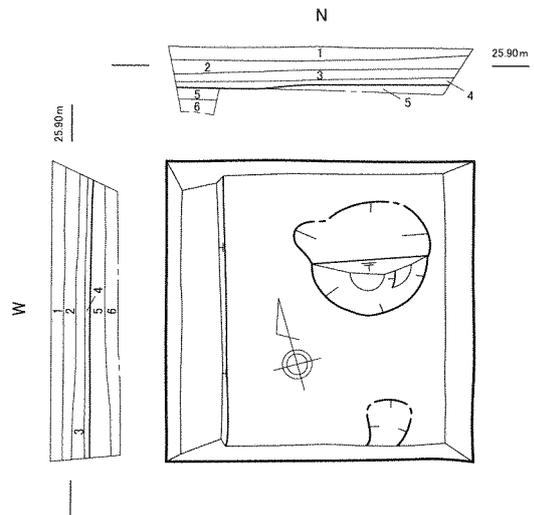


調査区平面図・層序図 1



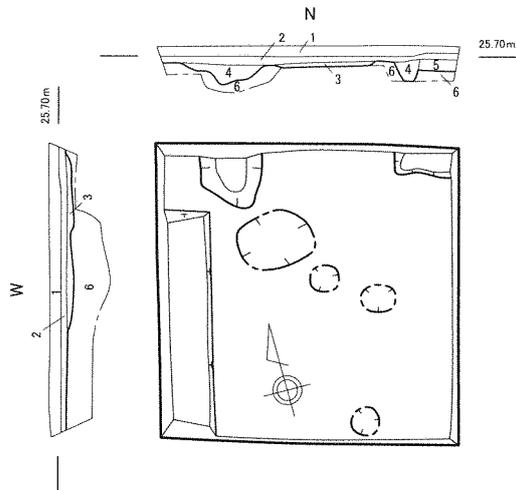
No.138

1. 褐灰色10YR6/1細砂質土(Mnわずかに・遺物含む)
2. 黄灰色2.5Y6/1細砂質土(Mnわずかに・遺物含む)
3. 褐灰色10YR5/1細砂質土(炭化物わずかに・遺物含む)
4. 褐灰色10YR4/1粘極細砂質土
5. にぶい黄色2.5Y6/3細砂質土



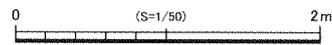
No.127

1. 灰黄褐色10YR6/2細砂質土(Feわずかに・遺物含む)
2. 灰黄色2.5Y6/2細砂質土
3. にぶい黄橙色10YR7/3極細砂質土(Feまばらに・遺物含む)
4. 褐灰色10YR6/1細砂質土(Mn多く含む)
5. 褐灰色10YR4/1粘質土(Mnわずかに含む)
6. 明黄褐色10YR7/6粘質土

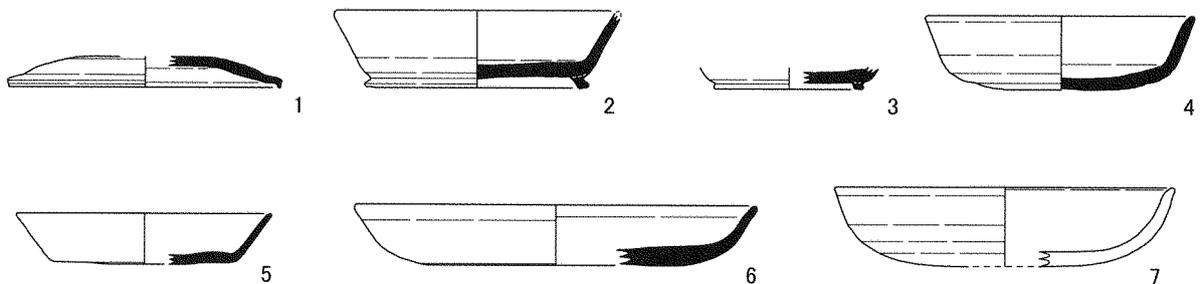


No.158

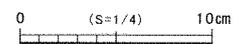
1. 黄灰色2.5Y6/1細砂質土(遺物含む)
2. にぶい黄橙色10YR7/3粘質土(Fe多く含む)
3. 黄灰色2.5Y5/1細砂質土(遺物含む)
4. 褐灰色10YR6/1細砂質土(Mnわずかに・遺物含む)
5. 褐灰色10YR5.5/1細砂質土(Mnわずかに含む)
6. 黒褐色10YR3/1粘質土



調査区平面図・層序図 2



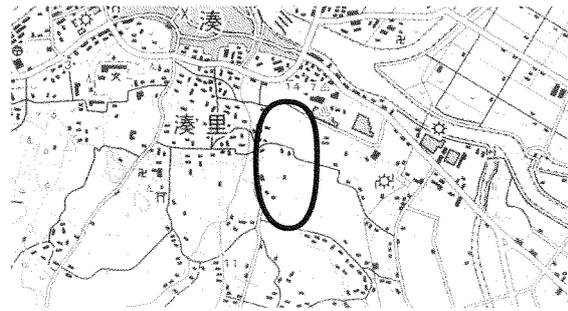
- 1・3. No.53 5層 4. No.53 8層 6. No.53 7・8層
 2・7. No.53 7層 5. No.53 6層



No. 53 調査区出土遺物

2 ^{ひらいし}平石遺跡 -5次調査-

所在地 湊里字西外
事業名 経営体育成基盤整備事業
担当者 的崎薫・定松佳重・山崎裕司
種別 本発掘調査+立会調査
調査期間 平成25年7月16日～平成26年1月17日
調査面積 本発掘調査2502.6㎡+立会861㎡



調査の位置

1 調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野が播磨灘に面し、大日川と三原川が合流する左岸に位置する。標高は3.2～8.5mを測る。周辺には、遺跡が多く立地する。

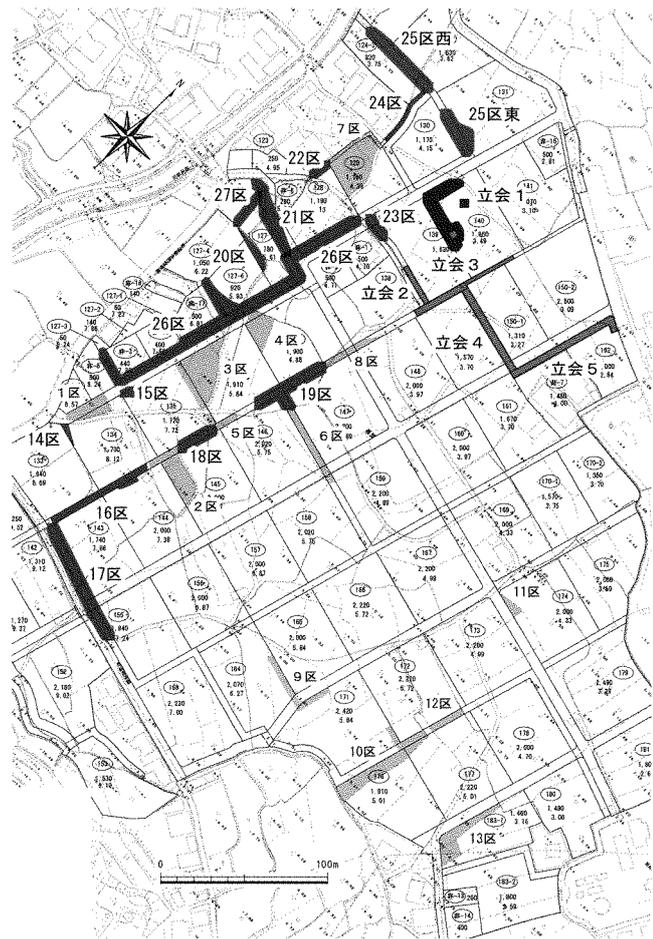
平成21年度に実施した遺跡範囲確認調査では弥生時代～中世の遺構・遺物を広範囲で確認し、事業実施によって遺跡に影響の及ぶ範囲のみ平成24年度より本発掘調査を行っている。2年目にあたる平成25年度は14～27区と立会1～5の調査を行った。以下、主な調査区のみ記述する。

[16区] (292.5㎡・延べ421㎡)

排水路の調査区で、遺構面を3面確認した。

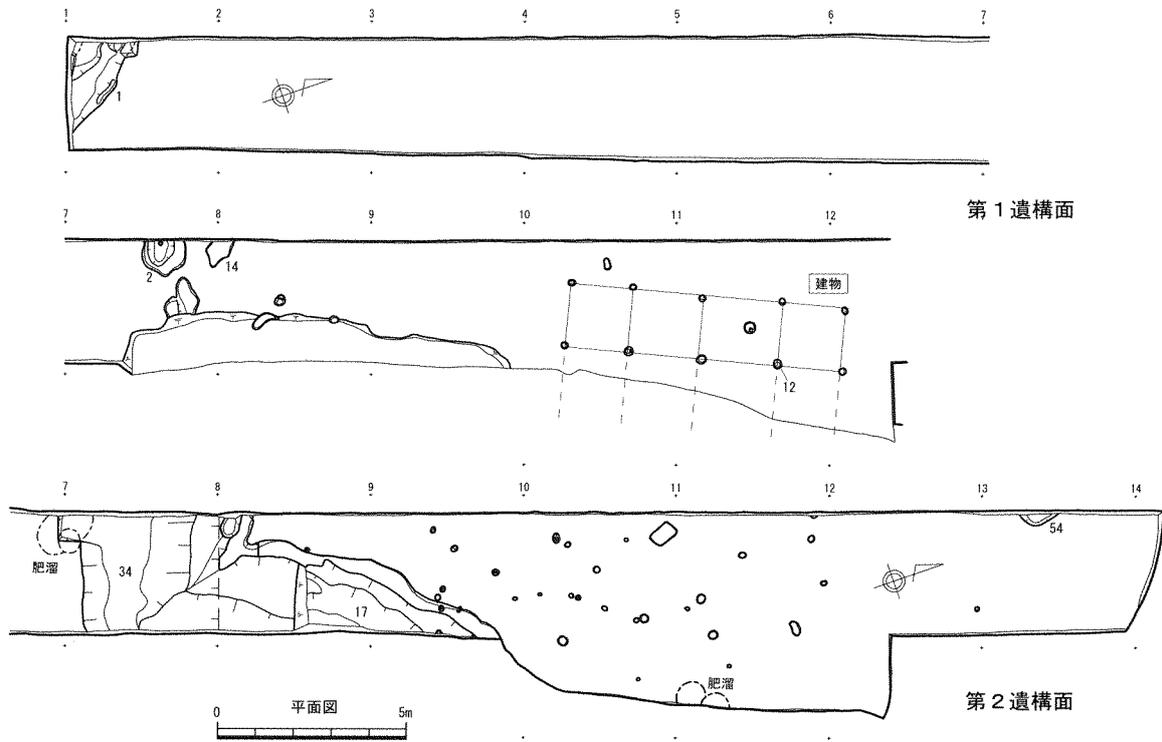
第1遺構面では、南端部で遺構1(流路)を確認した。幅1.8m、深さ1.2mを測る。出土遺物は非常に少なく、上層より中世初頭の土師器鍋・須恵器捏鉢、下層より奈良時代の須恵器壺底部**3**が出土した。また、遺構面である灰黄褐色粘質土(表土下-50cm)より窯壁と思われる硬質の土塊が出土し、周辺に窯が存在した可能性も考えられる。7ブロックより北側では田圃の造成時に大きく削平を受けていた。そのため7～8ブロックでは耕作土直下において製塩土器丸底IV式の密集部分を2ヶ所(遺構2・14)検出した。遺構2は地面が赤変しており、ここで製塩作業(焼塩)を行っていた可能性が高い。10～12ブロックでは4間×1間以上の掘立柱建物を確認した。建物は調査区の東側に続き、全体の規模は不明である。土師器片が出土したが、時期判断は困難であり、周辺の状況から奈良時代と思われる。遺構12より長さ17.8cm、最大幅1.7cmを測る鉄製小刀**6**が出土した。柱を抜いた後の埋納と考えられる。

第2遺構面は、7～8ブロックで流路を2条(遺構17・34)確認した。南から流れ込む遺構17の蛇行

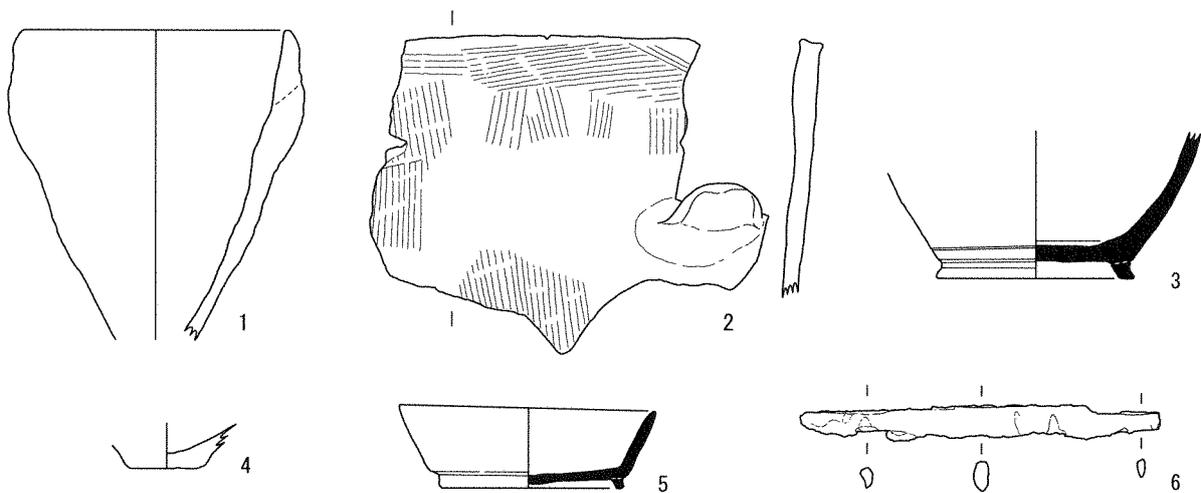


調査区設定図

部分を検出した。やや湿地状の土壌堆積をしており、須恵器5・土師器・製塩土器・弥生土器4を含む。その後奈良時代には東西方向に遺構34が流れ、製塩土器丸底IV式の大きい破片1や移動式竈片2を含む。遺構1や34を含む平石遺跡の東西方向の流路は、埋土に礫を多く含み、わずかな土師器片から奈良時代と思われる溝がほとんどである。第1遺構面と第2遺構面から出土した製塩土器には大きな時期差がなく、また、土石流のような土壌堆積から、西側に流れている柿木谷川の氾濫が起こった可能性が考えられる。壁面観察により11ブロックから北の狭い範囲でもう1面遺構面を確認できたが、遺構検出は第2遺構面と同一面となっている。(定松)



16区 平面図



- 1・2 遺構 34 3 遺構 1
4・5 遺構 17 6 遺構 12

16区 出土遺物

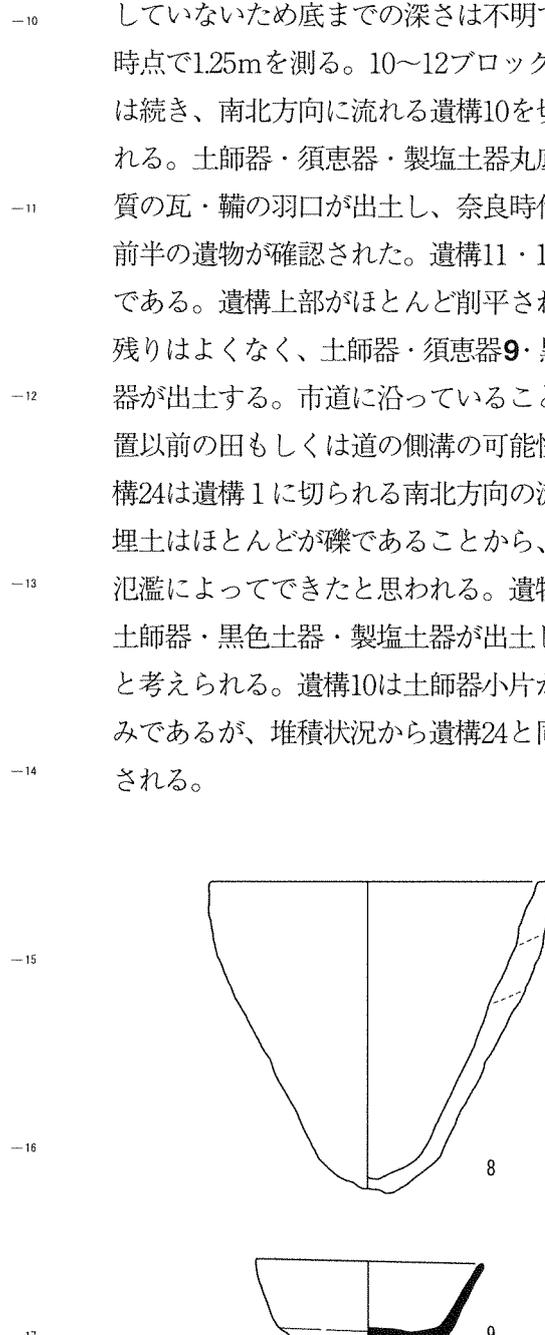
[17区] (259.3㎡)

市道沿いに位置する排水路の調査である。全体に削平を受けているため、比較的浅い地点で遺構を確認した。西端と中央部には玉葱小屋が建っていたため、その部分の調査は行っていない。遺構1は16区の遺構1から続く流路である。調査区の西端から東西方向に縦断し、5ブロックで一旦調査区の北側へ

外れるが、7～9ブロックでは再び調査区の北面に平行して流路の肩部分が調査区に掛かる。完掘していないため底までの深さは不明であるが、現時点で1.25mを測る。10～12ブロックにも遺構1は続き、南北方向に流れる遺構10を切って北に外れる。土師器・須恵器・製塩土器丸底IV式・土師質の瓦・轆の羽口が出土し、奈良時代～平安時代前半の遺物が確認された。遺構11・13は同一遺構である。遺構上部がほとんど削平されているため残りはよくなく、土師器・須恵器9・黒色土器・瓦器が出土する。市道に沿っていることから市道設置以前の田もしくは道の側溝の可能性もある。遺構24は遺構1に切られる南北方向の流路で、その埋土はほとんどが礫であることから、柿木谷川の氾濫によってできたと思われる。遺物はわずかに土師器・黒色土器・製塩土器が出土し、平安時代と考えられる。遺構10は土師器小片が出土したのみであるが、堆積状況から遺構24と同時期と推測される。
(定松)



17区 平面図

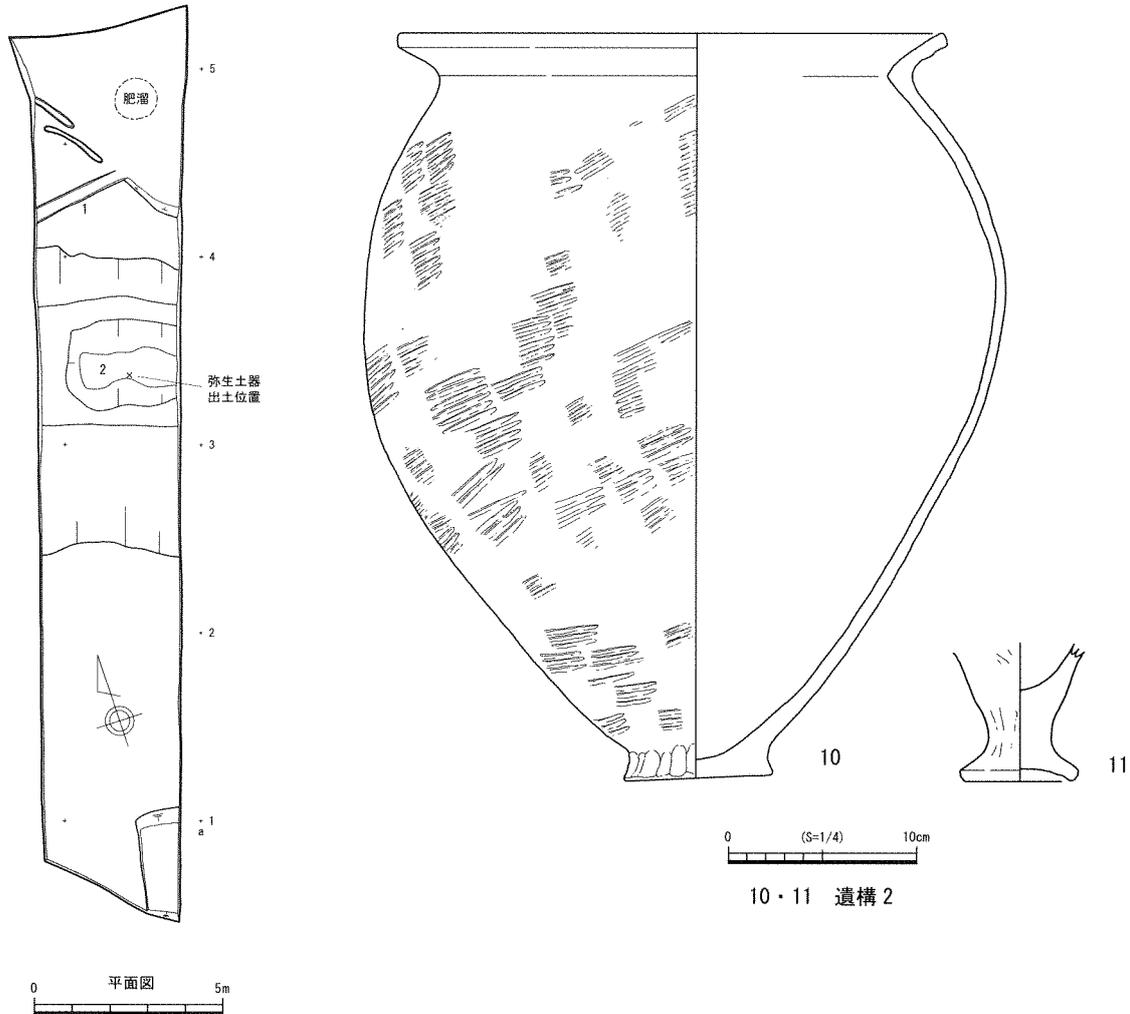


8 遺構 2
9 遺構 13

17区 出土遺物

[18区] (89.4㎡)

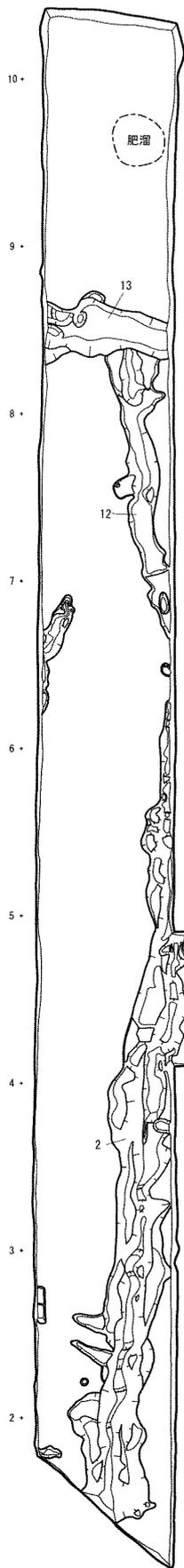
排水路の調査である。調査区のやや北よりで東西方向に流れる幅約7mの流路2を検出した。埋土中層より弥生時代後期と推定される甕**10**、下層より脚台付I式と思われる製塩土器**11**が出土している。溝1は肥溜と同様、近世以降の遺構と思われる。(山崎)



18区 平面図・出土遺物

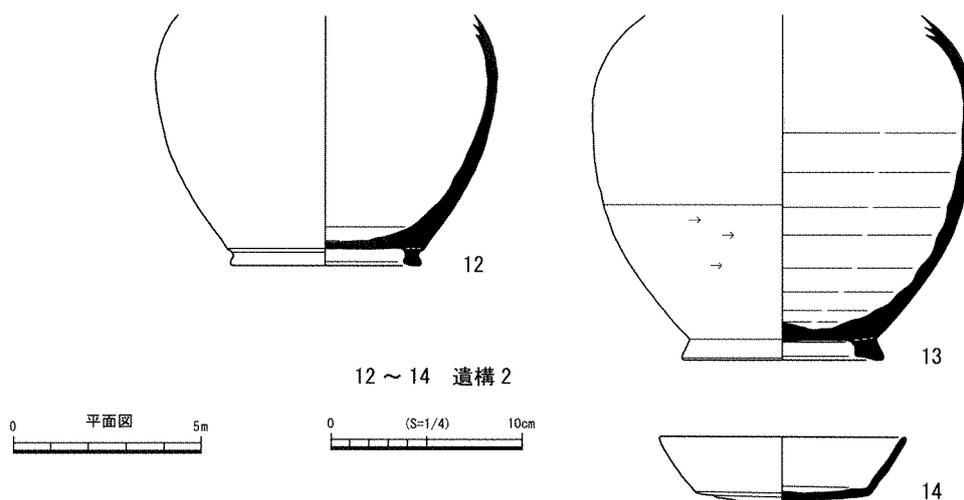
[19区] (213.0㎡)

排水路の調査である。この調査区も全域が南北方向に流れる流路内にあたり、深部を遺構2として検出した。3～5ブロックの上層から製塩土器丸底IV式片が多量に出土した。炭化物は少量で焼土は未確認のため、作業場所ではなく一括廃棄されたものと思われる。他に須恵器壺**12**・**13**や坏**14**が出土し、奈良時代と思われる。最下層より弥生時代終末期の東阿波型土器が出土しているが、この流路から同時期の遺物は見られない。出土した製塩土器の中に、内面に布目がある土器片が2点(同一個体)含まれていた。内面に布目を持つ丸底IV式の生産地は南あわじ市でしか確認されていないが、胎土は在地のもの異なる。丘陵をはさんで南に位置する後山遺跡でも同時期の製塩土器丸底IV式が出土しており、ほとんどが内面に布目を持つ。距離的にあまり離れていないにも関わらず、土器製作時の布の使用の違いは何によるものか不明である。また、排土採集であるが、製塩土器内面に須恵器と同様の同心円文が施されているものがあり、製塩土器製作に須恵器工人の関与が考えられる資料である。どちらも薄手の製塩土器で



ある。他に、移動式竈片も出土した。後山遺跡でも製塩土器とともに移動式竈が出土している。時代は異なるが淡路市貴船神社遺跡や富島遺跡でも製塩炉や製塩土器の出土とともに竈が出土しており、製塩土器と竈は道具としてセット関係にあると推測する。また、鞆の羽口と思われるものが16区と17区合わせて4点出土しており、鍛冶だけではなく製塩作業にも使用された可能性を今後視野に入れたい。

調査区内で他にも遺構12・13の溝を確認した。時期確定が明瞭にできる出土遺物はないが、検出時に遺構12の先行を確認している。また、古墳時代の遺物はなく、遺構も確認できなかった。丘陵と三原川の後背湿地との境界付近にあたると思われる。(定松)



19区 平面図・出土遺物

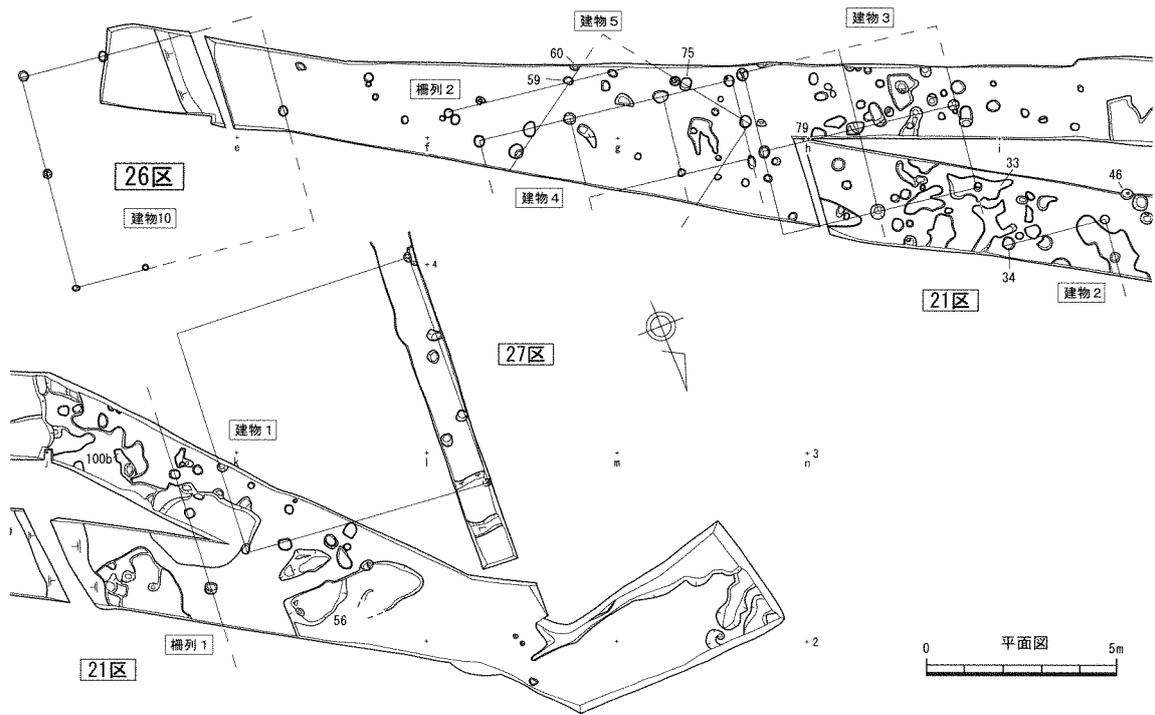
[21・27区] (159.3㎡+24.0㎡)

排水路の調査で、設計変更により一部掘り直しを行った。掘立柱建物5棟と柵列が復元できた。建物1～4と柵列1・2、隣接する26区の建物9・10は同方位で、周辺に鎌倉時代の集落が広がっていたと考えられる。方位の違う建物5は平安時代の建物と推定される。他に飛鳥時代と縄文時代の遺構が検出された。

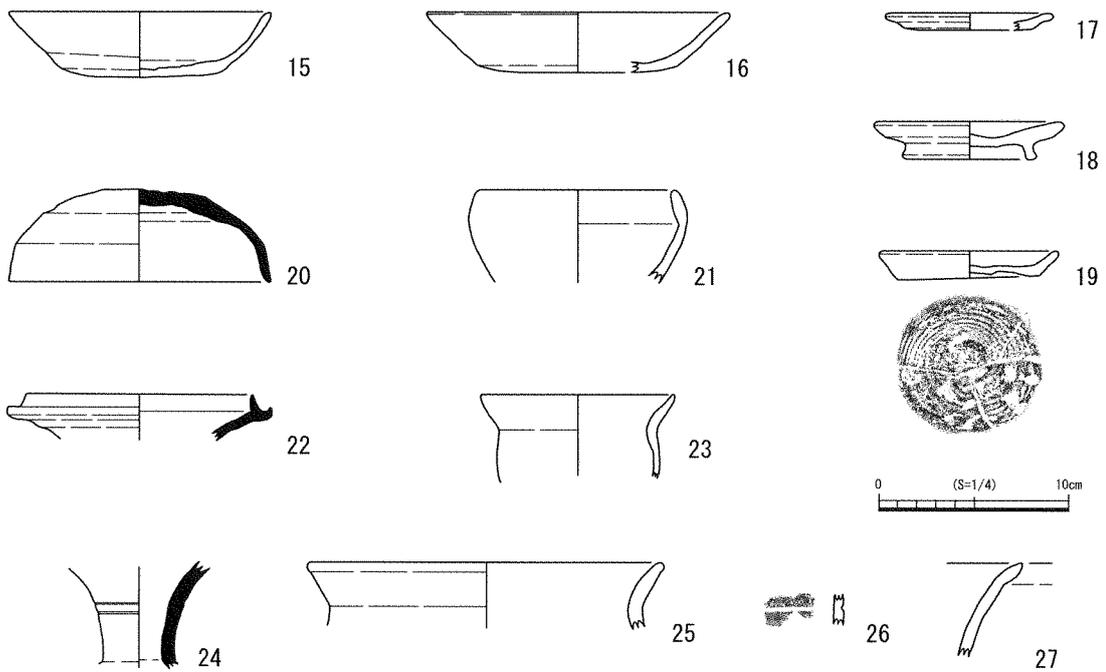
建物1 南北3間×東西3～4間の側柱建物と推定される。東側に柵列1が付設される。

建物2 南北1間以上×東西1間以上の建物と推定される。遺構34から鎌倉時代と思われる土師器の回転糸切底部の小片が出土している。

建物3 南北2間以上×東西2間の総柱建物と推定される。柱筋が建物4と



21区 平面図



- 15 柱穴 59(柵列 2) 16 柱穴 60(建物 5) 17 柱穴 75(建物 5) 18 遺構 33
 19 遺構 46 20~25 土坑 56 26 土坑 79 27 土坑 100b

21区 出土遺物

ほぼ揃っている。

建物4 南北1間以上×東西3間以上の総柱建物と推定される。南側に柵列2が付設され、柱穴59から鎌倉時代と思われる土師器皿**15**が出土している。

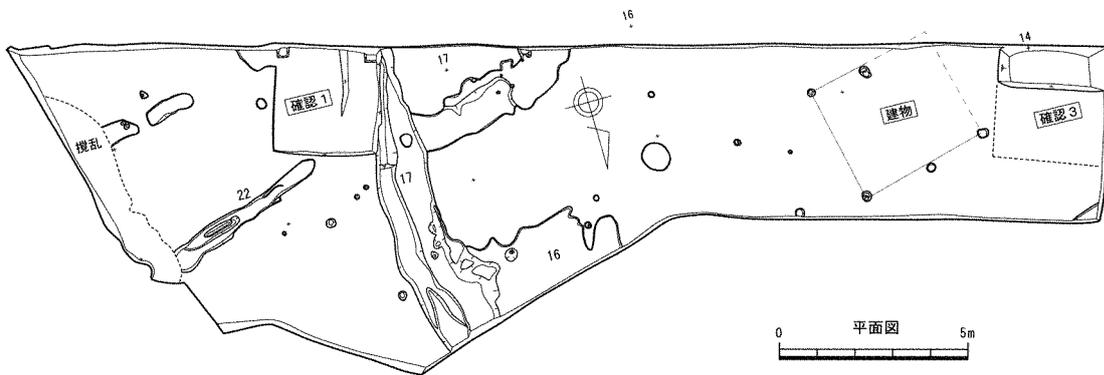
建物5 桁行3間以上×梁行2間の側柱建物と推定される。柱穴60・75から平安時代と思われる土師器皿**16**・小皿**17**が出土している。

土坑56 飛鳥時代頃と思われる須恵器蓋坏**20**・**22**が出土している。

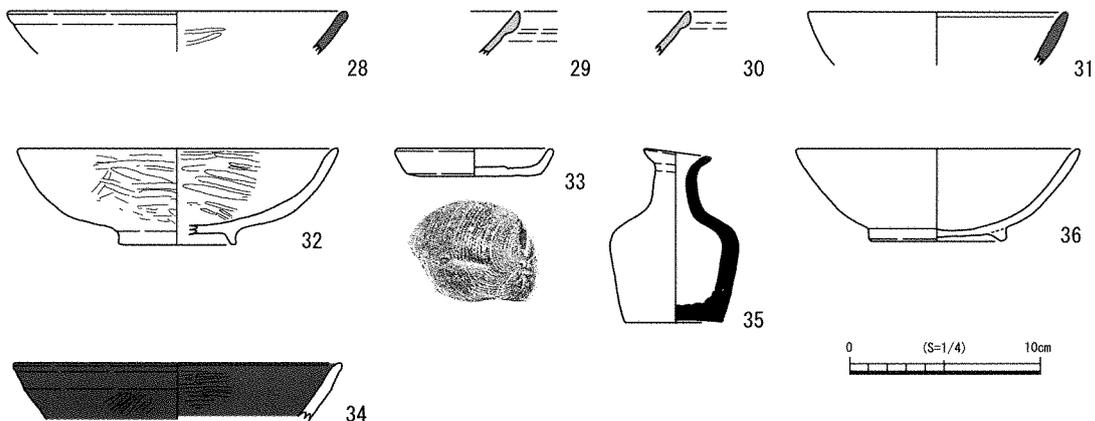
土坑79・100b 流れ込みの可能性もあるが、縄文時代後期の土器片 **26**・**27**が出土している。(山崎 [25区] (387.1㎡)

排水路と圃場面の調査である。第1遺構面から検出された遺構は溝17のみである。溝17は遺構16を切っていることから鎌倉時代以降であるが、溝17の出土遺物 **28**・**29**は第2遺構面の遺構埋土や包含層からの流れ込みの可能性が高い。

その他の遺構は第2遺構面から検出されており、平安時代後半～鎌倉時代の遺構と推定される。梁行1間×桁行2間の小規模な掘立柱建物が復元できた。隣接する確認調査区3の土器だまりから平安時代後半の土器**35**・**36**が出土していることから、建物もその時期と推定される。落ち状の遺構16からは鎌倉時代の土器が多く出土している。(山崎)



25区 平面図



28・29 溝17 30～33 遺構16 34 溝22

35・36 確認調査区3(土器だまり)

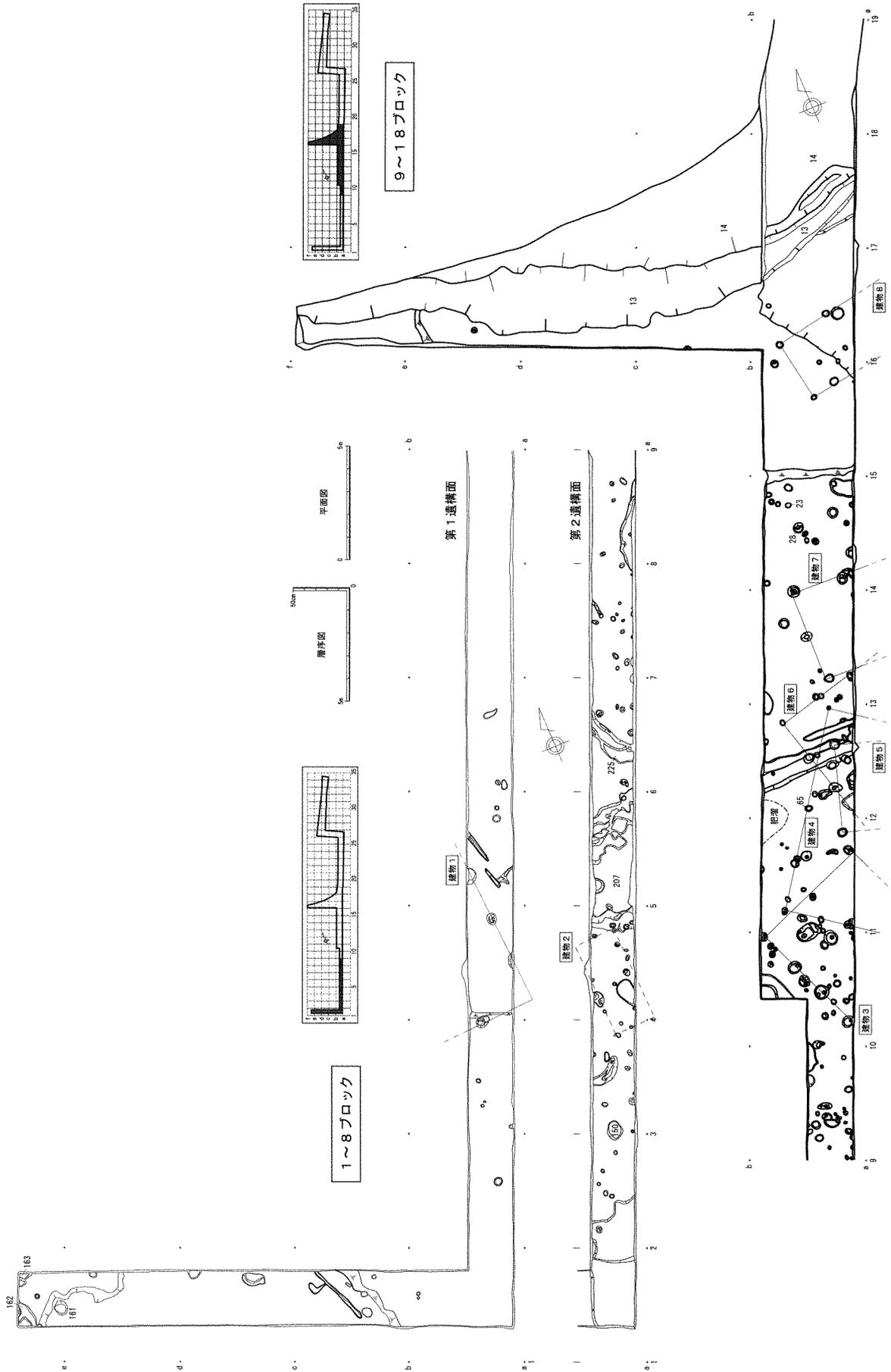
25区 出土遺物

[26区] (863.6㎡・延べ1198.6㎡)

排水路と圃場面の調査である。調査区の数字は南から、アルファベットは東から順に設定した。調査区全体で掘立柱建物12棟と溝や土坑・小穴などを確認した。

1a～1eブロックは東西方向の排水路である。比較的浅く、上層は攪乱を受けている。遺構からは縄文土器・弥生土器・土師器・サヌカイト片が出土し、数時期の遺構が混在していることが埋土からもわかる。1d～1eブロックでは縄文時代後期の遺構161～163と単純包含層を確認している。この包含層からは縁帯文土器**37・38**やサヌカイト製の石鏃**54～56**やサヌカイト片、蛇紋岩製と思われる定角式磨製石斧**57**などが出土している。

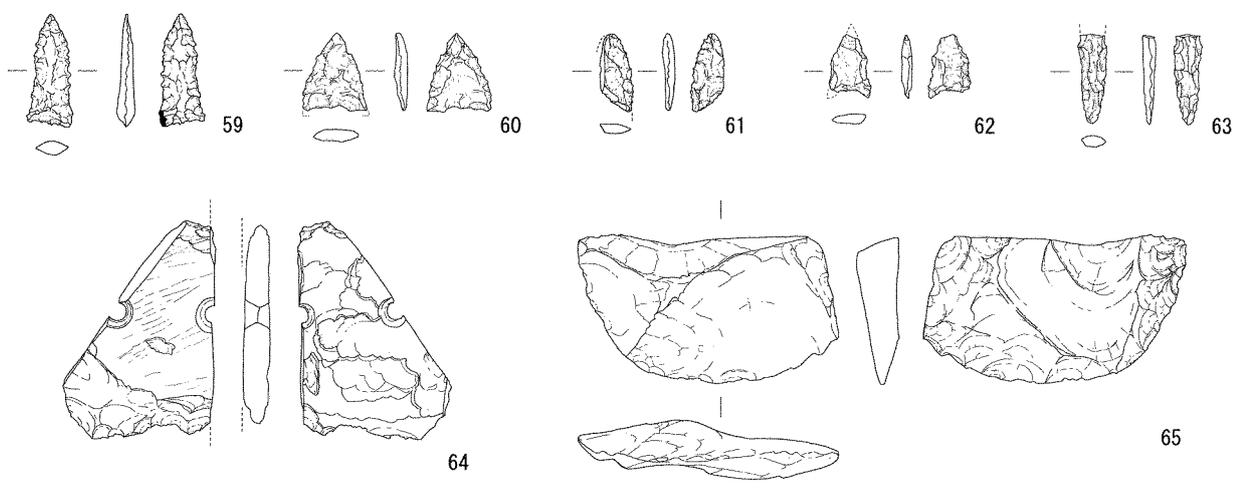
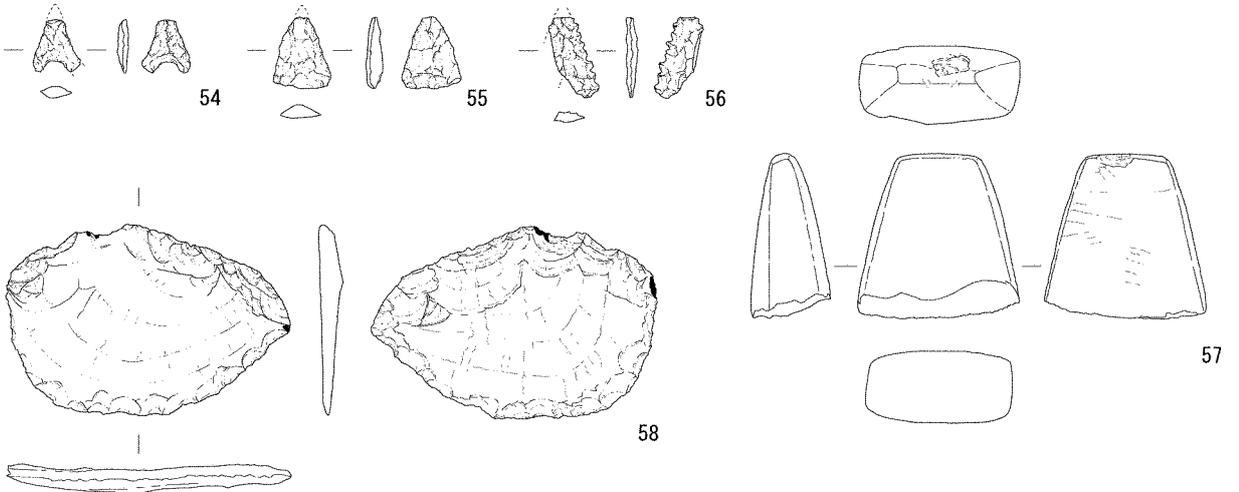
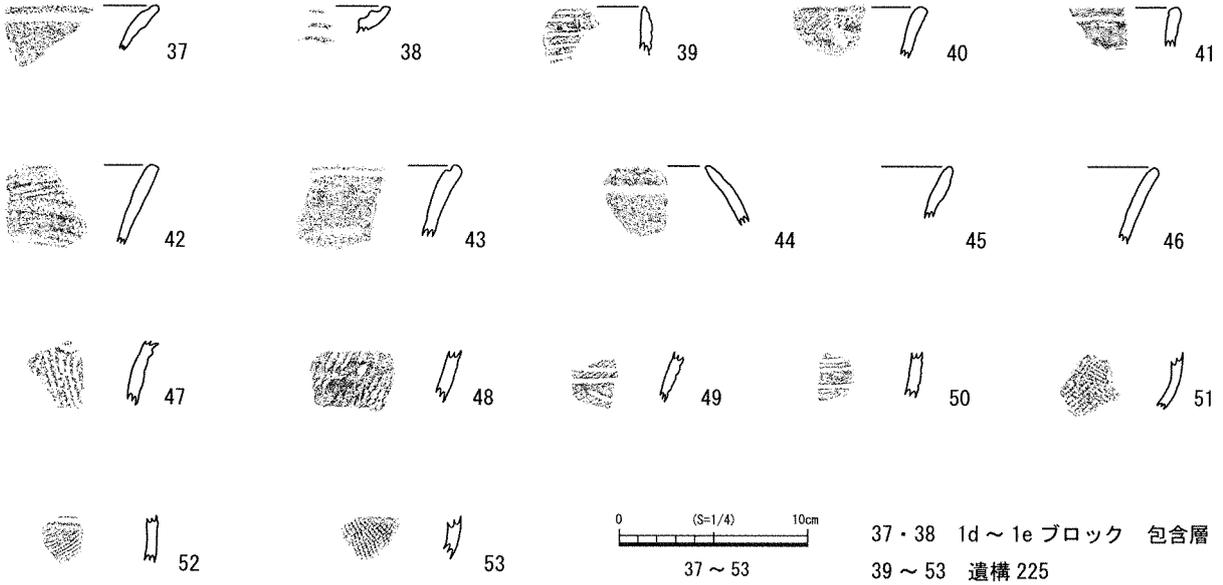
1a～18aブロックは南北方向の排水路と圃場面の調査区で、比較的まとまった遺構を確認した。1a～8aブロックでは壁面観察で遺構面が5面以上ある所も確認したが、面的には2面の調査を行った。第1遺構面では建物1と小土坑などを検出した。建物1は3間以上×2間以上の建物で、柱穴はどれも深さ60cmほどを測る。土師器や須恵器・瓦器などが出土し、鎌倉時代である。第2遺構面では複数の遺構面から掘り込まれた遺構を検出し、建物2と溝や土坑などを確認した。建物2は3間×2間の建物である。柱間の間隔が1.2～1.6mと狭いことと、出土遺物から弥生時代の建物と考えられる。遺構150は土坑で弥生時代中期の土器やスクレーパー**58**が出土している。遺構207は溝で、壁面観察から大きく2つに分けられる。上層からは弥生時代前期末～中期前半の土器**76～95**や石鏃・石錐・擦石・敲石・石包丁・石棒・石錘などの石器類**59～70**が出土している。下層からは柿木谷川の氾濫による礫層で弥生土器をわずかに含んでいた。第2遺構面の幅0.9m、深さ0.2mの溝である遺構225は縄文時代の遺構で、後期の土器**39～53**や石鏃**71～75**が出土している。9a～14aブロックは田圃の造成時に大きく削平されているため、遺構面は1面しか確認できなかったが、遺構埋土は数種類確認し、建物3～7と土坑などを検出した。建物3は2間以上×2間と考えられる建物で東側に続く。明確な時期のわかる遺物は出土していないが、平成24年度本発掘調査3区（以後平成24年度本発掘調査は省略）建物1の北西に同じ主軸で建つ建物であることから古代の範疇と考える。建物4は4間×1間以上で東に続く。建物を構成する柱穴である遺構65上層からは鉛製ミニチュア三足器**96**が出土した。口径2.5～2.9cm、器高2.4cm、重さ49gで、蛍光X線分析の結果、ほぼ100%鉛の铸造品であることがわかった。鉛製の器というのは非常に珍しく、全国的にも類例を見ない。携帯用の仏具と推測される。遺構65からは土師器の小片がわずかに出土しているのみである。このほかの柱穴からは黒色土器B類などが出土し、平安時代の建物と考えられる。建物5は2間×1間以上、建物6は2間以上×2間以上、建物7は1間以上×2間であり、どれも東側に続く。これらの建物は柱穴からわずかな土器しか出土していないため建物の時期は断定しがたい。建物6は3区建物2・5と主軸が同じである。建物を構成しない遺構では、遺構23からは完形に近い土師器の高台付埴**97**や皿**98～100**がまとめて出土している。いずれも回転ヘラ切りであり、建物4と同じ平安時代である。遺構28からは弥生時代中期前半の底部が穿孔された甕の下半部が穴に据え置かれた状態で出土した。15a～18aブロックでは圃場面は工事で影響がおよぶ高さまでしか掘削を行っていないため、遺構も完掘していない。建物8や溝などを確認した。建物8は1間以上×1間で東側に続く建物と考えられる。柱穴から遺物は出土していない。遺構13は溝で、排水路部分しか完掘していないが、弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器・サヌカイト片や移動式竈が出土し、特に丸底Ⅳ式の製塩土器が目立つ。奈良時代後半頃と思われる。この溝と平行して建っている建物8は同時期の可能性がある。また、この溝は8m東に位置する4区の溝につながると考えられる。遺構14は遺構13に切られる流路で、断面より大きく2つに



26区 平面図1



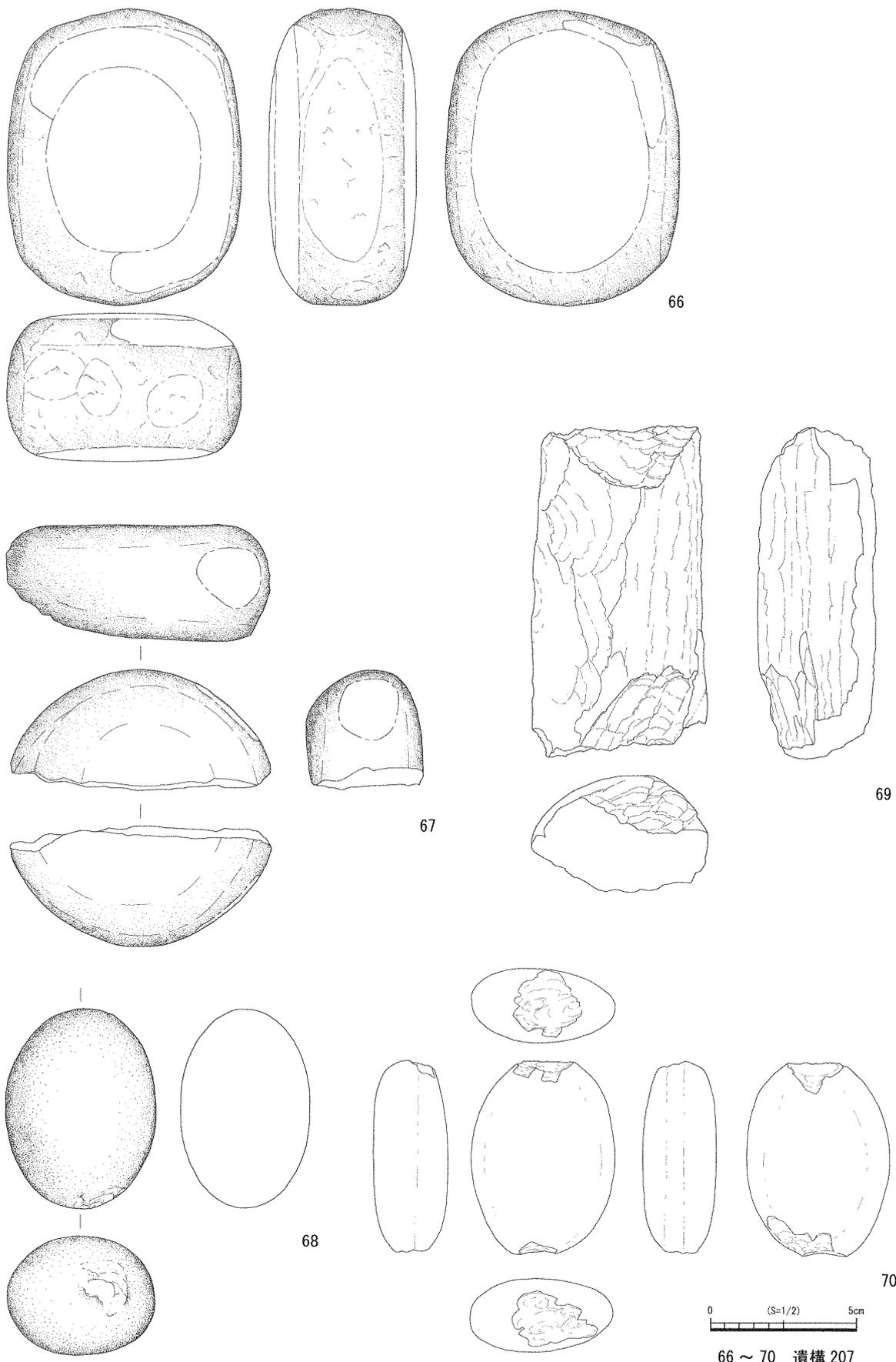
26区 平面図2



54 ~ 57 1d ~ 1e ブロック 包含層
58 遺構 150 59 ~ 65 遺構 207

0 (S=1/2) 5cm
54 ~ 65

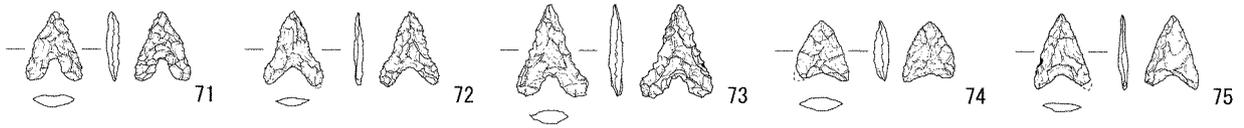
26 区 出土遺物 1



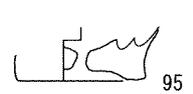
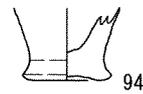
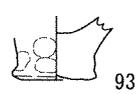
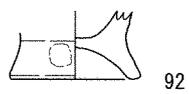
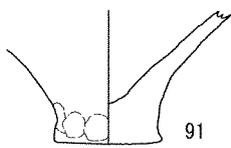
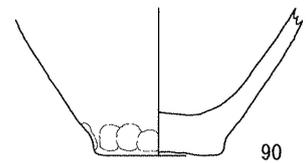
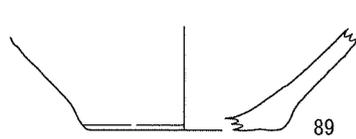
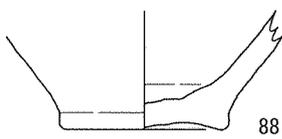
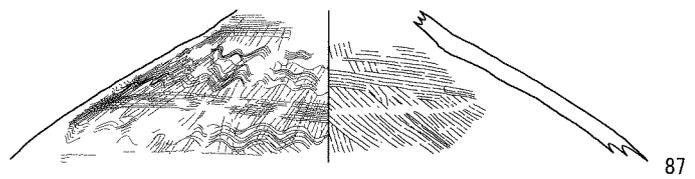
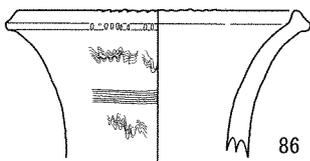
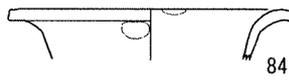
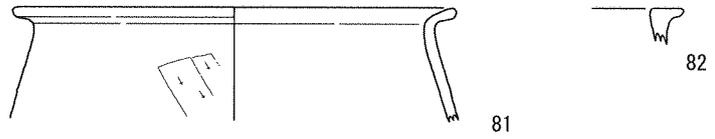
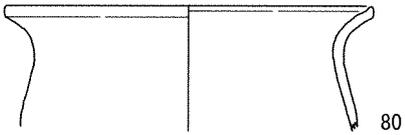
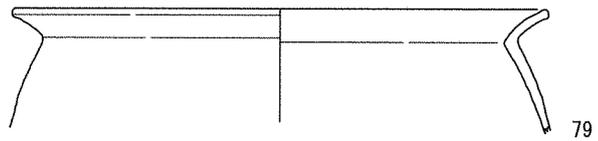
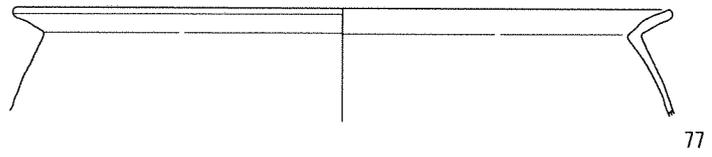
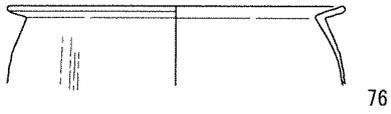
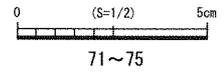
26区 出土遺物 2

0 (S=1/2) 5cm

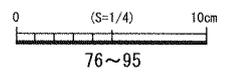
66 ~ 70 遺構 207



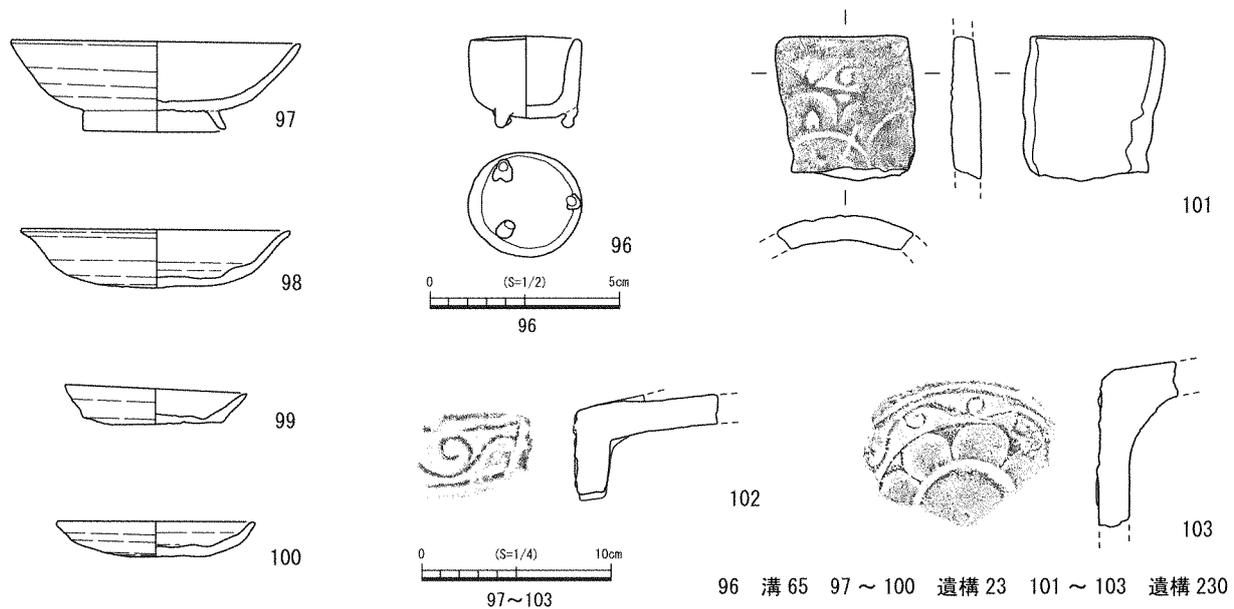
71 ~ 75 遺構 225



76 ~ 95 遺構 207



26区 出土遺物 3



26区 出土遺物 4

分かれる。下の流路は礫が多く、柿木谷川が氾濫したものと思われる。上の流路は下が埋没し、その上にやや安定した黄色系土が堆積した後に再び流れていた流路であることから、この2つの流路の間には長期の時間経過が考えられる。上からは土師器や弥生土器が、下からはわずかながらに弥生土器が出土しているが、明確な時期はわからない。

19a~26aブロックでは、流路などを確認した。遺構230は東西に横断する幅約27mの大きな流路で、断面から大きく南・中央・北に分けることができ、中央の流路が一番新しい。中央流路からは弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器・黒色土器・瓦・瓦器・輸入陶磁器・サヌカイトなど弥生~鎌倉時代の幅広い遺物が上層から下層にわたって出土した。瓦の中には軒丸瓦の范を丸瓦の玉縁部凸面に2度押し当てた痕跡の残るもの**101**や均整唐草文軒平瓦**102**が含まれていた。この流路の排土からは淡路国分尼寺出土の軒丸瓦と同紋の唐草文軒丸瓦（GNM32形式）**103**を確認している。この文様の瓦は寺院関連遺跡である里原田遺跡（湊里地区）や当遺跡の確認調査でも出土している。今回出土した流路周辺の小字は寺内であり、遺跡の中では比較的瓦の出土が見られる場所である。周辺に寺が建っていた可能性が高い。北側の流路は遺物が少なく、弥生土器がわずかに出土している。南側の流路は17~18ブロックの遺構14の下層の流路の続きで、遺物は確認できなかった。

26a~34cブロックにかけては、遺構面を南側で2面、北側で4面確認した。第1遺構面では建物9~11と小穴や土坑などを確認した。建物9は2間×1間以上の総柱建物で、建物10は21区にまたがる3間×2間の建物である。建物9・10は21区の建物1~4と主軸が揃っている。建物11は2間以上×2間の建物で柱穴から瓦器が出土している。建物9~11は鎌倉時代の建物と考えられる。第2遺構面では建物12と土坑などを確認した。建物12は3間×1間以上の建物で柱穴から瓦器が出土している。第1遺構面と第2遺構面は鎌倉時代の遺構で、あまり時期差はないものと考えられる。第3遺構面は31c~34cブロックで溝である遺構334や土坑を確認した。遺構334からは飛鳥時代の須恵器や土師器が出土している。第4遺構面は33c~34cブロックで土坑を確認した。出土遺物が無く、時期は不明であるが、弥生時代までは遡らないと思われる。

(的崎)

【まとめ】

今回の調査で、縄文時代後期～鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。遺跡全体としては、柿木谷川の氾濫による流路が主に東西方向で何条も見つかり、たびたび水害を受けていたことがわかった。

縄文時代後期の遺構は26区の南部から3区にかけて広がっている。遺構密度は低いものの、単純包含層も見つかっている。また21区の遺構や26区26c～28dブロックの包含層でも、流れ込みの可能性はあるが、縄文時代後期の遺物が含まれていることから、調査地周辺に集落が営まれ始めたのはこの頃のようなのである。

弥生時代の遺構は弥生時代前期末～中期前半を中心とした遺構が15区・26区南半で見つかっている。26区の遺構207は3区遺構241につながる溝であることがわかった。今回の調査でこの時期の建物は掘立柱建物が1棟しか見つかっていないが、3区では竪穴住居が確認されていることから、周辺に数棟の竪穴住居が展開していたと思われる。弥生時代後期の遺構は18区溝状遺構2で見つかっているが、この時期の遺構・遺物は少ない。

縄文～弥生時代の遺構は2区・18区・3区・26区18ブロックより南西で主に見つかっている。これらの調査区は標高6mのラインに位置し、微高地と低湿地の境にあたる。現段階では弥生時代の水田遺構は未確認であるが、遺構より石包丁が出土していることから、周辺の低湿地では稲作が営まれ、微高地の3区・26区周辺に居住域が設けられていたと思われる。

飛鳥時代は21・26区で遺構や遺物を確認したが、建物は確認できていない。

古代には奈良～平安時代の建物や遺構が多く見られるが、25区を除けば建物は微高地に建てられている。また古代の特徴的な遺物として製塩土器の丸底Ⅳ式があげられる。当遺跡で出土しているのは丸底Ⅳ式の中でも器壁が厚めの8世紀後半～9世紀前半にかけてのもので、16・19・26区で大量に出土している。特に16区遺構2・14や4区遺構2は焼塩作業を行った遺構と考えられ、調塩として都に運ばれる塩生産の一端を担っていたものかもしれない。

中世になると鎌倉時代には遺跡全域で建物などの遺構を確認し、明らかに居住域は標高が低い場所まで広がっている。湿地帯のなかでも比較的安定した土壌の場所を選んで居住していたと思われる。今回は室町時代の遺構は確認していないが、今までの調査でも10区で建物を3棟確認しているだけであり、包含層からの遺物も非常に少ない。

湊地域は古代以降、淡路国の国津（港）として栄えてきた海上交通の要衝であり、平石遺跡でも奈良時代～鎌倉時代にかけて繁栄していたが室町時代には急速に衰退したことがうかがえ、その歴史的背景や要因なども今後考えていかななくてはいけない。

(的崎)

2018年3月27日発行

南あわじ市埋蔵文化財調査年報X
2013年度 埋蔵文化財調査

発行 南あわじ市教育委員会

編集 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所

〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衛1100

TEL 0799-42-3849

印刷 佐藤印刷

〒656-0501 兵庫県南あわじ市福良甲1006-4

TEL 0799-52-0049